

イチゴ栽培を変革する種子繁殖型品種の育成

1 中核機関・研究総括者

千葉県農業総合研究センター 石川 正美

2 研究期間

2005～2008 年度（4 年間）

3 研究目的

国内の主要な果実であるイチゴ生産において、炭疽病の被害が著しく、健苗の確保は生産者の大きな負担となっている。また、栄養体で増殖するためにウイルスフリー苗が利用されているが、苗増殖には多大な労力及びコストがかけられている。

種子繁殖がイチゴにおいても可能になれば、これらの病害問題を抜本的に解決することができる。さらに、ランナーによる増殖に比較して、種子繁殖での育苗は、省力・軽作業化と育苗期間の大幅な短縮が可能となる。

そこで、本課題では、イチゴ栽培に画期的な変革をもたらす種子繁殖型イチゴ品種の育成と実用化技術を確立する。

4 研究内容及び実施体制

- ① 種子繁殖型イチゴ優良品種の育成（千葉農総研、千葉大学）
育成中の自殖系統を用いて種子繁殖型イチゴ F₁ 品種を育成する。
- ② 種子繁殖型イチゴの種苗生産方式の確立（千葉大学、千葉農総研）
優良種子採種法、発芽促進法、セル成型育苗法を確立する。

5 目標とする成果

国産の種子繁殖型イチゴ品種を用いた栽培体系が確立される。これにより、無病種苗の安定供給、育苗労力の省力化、種苗業界の活性化が期待される。

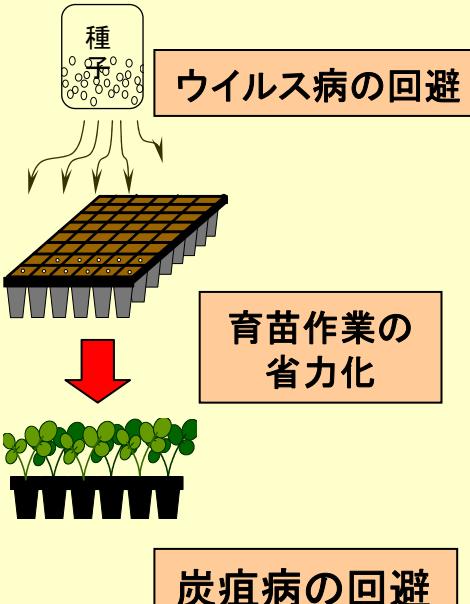
イチゴ栽培を変革する種子繁殖型品種の育成

従来の栄養繁殖育苗では

- ◆ウイルス病対策が必要
- ◆育苗労力がかかる
- ◆炭疽病の蔓延



種子繁殖型品種の育苗



種子繁殖型優良品種の育成

①DNA多型解析による固定化評価

AFLP解析



- ②固定系統の選抜・育成
- ③優良F1品種の育成

- 種子繁殖での均一性
- 促成栽培に適し多収
- 食味が良く、高糖度
- うどんこ病に強い

研究内容

種苗生産方式の確立

- ①優良種子生産方式の確立
- ②種子処理法の確立
- ③セル成型苗生産方式の確立



種子繁殖型品種の実用化

期待される効果

- ◆育苗負担からの解放
- ◆減農薬で安全、安心
- ◆イチゴ育種技術の発展
- ◆民間企業の参入